

2002年度第12回物学研究会レポート

「連戦連敗の中にこそ可能性はある」

安藤忠雄氏（建築家）

2003年3月27日



BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

2003年3月の物学研究会は建築家の安藤忠雄氏を講師にお招きしました。安藤さんには第一回の物学研究会でもご講演いただいております、ちょうど5年目という同会の節目に再登場いただきことができました。

この度は「連戦連敗の中に可能性はある」をテーマに、建築家という困難な生き方に対する飽くなき挑戦、戦い続ける姿勢の大切さ、その戦略、安藤建築が生まれる瞬間について、近年のプロジェクト、東京大学での教育活動などを通してお話しいたします。

以下はそのサマリーです。

「連戦連敗の中にこそ可能性はある」

安藤忠雄氏（建築家）



講演会場風景

「夢は自分で描くしかない」

こんばんは、安藤忠雄です。私が第一回の物学研究会で講演をしてもう5年になるんですか。月日が経つのは早いですね。

今日は「連戦連敗の中に可能性はある」というテーマで話を進めていきます。

私の著書に『連戦連敗』という本がありますが、現在の日本の社会はまさに連戦連敗なのではないかと思えます。その一番大きな原因は日本人が「夢」をもてなくなっていることにあるように感じます。私は5年ほど前から東京大学で建築を教えています、学生と話していて気になるのが、彼らの夢が少ないこと、夢が向こうからやってくると考えている学生が多いということです。最近の日本の停滞は、自分で道を切り開くのではなく、だれかが作ってくれた道を走っていかうと考えている人が

とても多いことに起因しているのではないのでしょうか。

私の建築家としての活動は1969年に大阪で小さい事務所を立ち上げたところから始まりました。その頃から私は「夢は自分で描くしかない」と考えていました。仕事は全くなかったので、大阪の街中をぐるぐる歩いて空き地があると勝手に建築のアイデアを描いていました。こうした試みが仕事に結びつくことはありませんでしたが、私にはとても良い建築のトレーニングになっていたのです。そのうちインテリアの仕事や延べ床面積で25坪ほどの小さい住宅の設計依頼が舞い込むようになってきました。当時の私は「こんな空間が良い」「こんな住宅を作りたい」とカッカッと燃えていますから、「安藤さん、僕は風呂が欲しいのです」「いや、シャワーだけで十分です」「でも風呂がなくては困ります」といった風に、クライアントさんに自分の意見を押しつけてしまうようなことも度々ありました。この時期に仕事をさせていただいた方々にはずいぶんご迷惑をおかけしたなと反省しています。

考えてみれば60年代、70年代と日本の社会は勝ち進んでいたのだらうと思います。私は60年安保、64年の東京オリンピック開催、69年の東大安田講堂の事件、70年の大阪万国博覧会開催や三島由紀夫の自決事件などを遠くに眺めていましたが、その頃の日本人は明確な目標を持って緊張感を保ちながら走っていたのだと思います。私自身もそんな社会の勢いに乗って、失敗も多かったけれど次代を生き抜く戦略を考え続けることができました。80年代になると日本経済はどんどん成長しバブル期を迎えました。90年代はその勢いに冷や水を浴びせられたという感じでしたが、90年代前半はすぐに復活するだろうと楽観的であったように思います。ところが21世紀を迎えた今、閉塞感は大きくなるばかりです。会場の皆さんも「このままだと日本は沈んでしまうのではないか」という認識をお持ちなのではないのでしょうか。まさに精神的な連戦連敗状態にあるといえます。

私自身は最近では大規模な建物も作りますし、国際的な建築コンペにも多く参加するようになっていきます。けれどもコンペでは10回挑戦する中で1回くらいしか勝てないという状況です。フランス人建築家のジャン・ヌーベルも勝率は1割程度と言っていましたから、現実はこのものなのでしょう。けれどもコンペはチャレンジです。負けても勉強になります。勝った相手の作品を分析してみると、自分たちの考えが足りなかったこと、余分なことを考えすぎたことなど、いろいろ発見し再考できます。長い目で見れば負け戦のほうがむしろ良い勉強になっているように思います。

実は今日、東京大学の卒業式と謝恩会があり、私はその合間を縫ってここに来ています。卒業式では学生たちへの挨拶を頼まれました。私は送る言葉として「21世紀は君たちが担っている、君たちの力にかかっているのだ」という話をしました。東大生は確かに知的レベルは高いのでしょう。けれども本当の意味での「考える力」や「生命力」をもっているのかどうか、私には分かりません。社会が元気であるためにもっとも重要なことは「人間力の強さ」なのだとは私は考えています。そういう意味ではちょっと不安を感じています。だからこそ夢を語り続けたいと思います。現在の日本は技術力や知力といった基盤はあるのですから、人間力に満ちた人たちが登場して活躍してくれば、日本の21世紀は大丈夫だと考えています。

「考え続けることが大切なのだと思います」

さて、ここからは最近のプロジェクトをご紹介しながら、私の建築や社会に対する取り組みや考えをお話していきたいと思います。

・「京都駅改築設計競技」

1991年に行われた京都駅のコンペです。最終的には原広司さんが当選されましたが、他にはジェームズ・スターリング、ベルナール・チュミ、黒川紀章さんらも参加していました。

私は大阪育ちで小さい頃から京都にはよく行っていたので、京都駅にも想い入れがありました。そして「庭園都市 京都」というコンセプトから建築のイメージを広げていったのです。駅の中心に「平成の大庭園」を設けて市民に開放し、現代の羅生門である巨大なツインゲート状の建物の中をホテルや商業施設にする。「平成の大庭園」によってJRの線路で分断されていた京都の南北は連続性を持つことができます。庭園越しに京都を一望できますので、「京都に居るんだ」という実感を得ることもできるだろうと考えました。けれどもこの案は敷地を飛び越えたものであり、予算的にも無理がありました。後に京都駅が完成して、中央コンコースの大空間を見て、コンペの要綱を一つ一つ緻密に積み上げていた原案のすばらしさを再確認しました。

・ローマ司教区教会国際設計競技

1996年にはローマ司教区教会の国際コンペがありました。これはローマ郊外のトル・トレ・テスト地区の教会とコミュニティセンター、オフィスや聖職者向け住宅が入る複合施設です。最終審査に残ったのはハンス・ホライン、ピーター・アイゼンマン、リチャード・マイヤー、フランク・ゲーリーに私を含めた6人で、結果はマイヤー案でした。私たちは三角形平面を持つ礼拝堂を中心に、水庭を囲む回廊に面してその他の要素を配していくというプランを作りました。中心である礼拝堂の天井には十字架型のトップライトを切って、「光の教会」ですでに実践していたようにトップライトから差し込む十字架状の光の束が室内で際立った存在感を持つことを意図しました。

私はどんなコンペでも全力投球で臨みます。だから自分たちの案が一番だと思っているわけです。コンペに参加するということは、実際の設計業務の合間を縫ってプランを作り上げていくわけですから莫大なエネルギーを要します。ところが大きな国際コンペともなると作品レベルとは異なる部分、例えば政治的判断や人間関係などで決定されることも度々あります。後からそんな話を聞きますと、ちょっと残念な気持ちにもなります。けれども一方で、与えられた仕事をしているだけでは前進もありません。忙しい日常業務の合間を縫ってコンペに参加したり、展覧会を企画したり、本を作ったり、頼まれてもない建物の図面や模型を作って世の中に提案する……、あらゆる機会を考え続けることが大切なのだと思います。

・大阪の街への提案

建築やデザインは現代社会にとって重要な仕事だと思います。なぜなら人は街で暮しています。子どもたちはクルマを見たり、椅子に座ったり、食卓のテーブルウェアで食事をしたりして育つのです。このように人の感性は生活空間の中で育まれるわけで、無秩序で勝手気ままな街並みや住空間から次代を担う豊かな感性は育ちません。私は事務所を設立した1969年頃から、そんな想いで大阪の

街に対して頼まれてもいない設計をやり続けています。当初は「大阪市内のビルの屋上を緑化しましょう」とか「ビルの高層部分には文化施設を作りましょう」というプログラムやイメージを描いて行政に提案していました。もちろん相手にもしてもらえませんでした.....。

その20年後には「中之島プロジェクト」として「アーバンエッグ」「地層空間」という構想を発表しました。中之島は堂島川と土佐堀川の間に浮ぶ幅100メートル長さ1000メートルほどの中州です。「アーバンエッグ」は1918年に作られた中之島公会堂の再生計画でした。この建物は当時東京大学教授だった辰野金吾がコンペの審査をし、岡田信一郎が設計したものです。建設費は岩本栄之助という財界人が大阪に相応しい公共施設を作りたいという意気込みで寄付しています。私はこの歴史的価値ある建物を何とか現代によみがえらせたいと考えました。そのために立派な模型やCGによるシミュレーションを作って大阪市、大阪府、政府に何度もプレゼンテーションをし、マスコミにも取り上げられて話題を呼びました。このプロジェクトにも多くのエネルギー、時間、費用を費やしましたが、実現には至りませんでした。こんなとき、「きっとだれかが考えるチャンスにくれたんだ」と考えることにしています。真剣に考えたり取り組んだことは、後になって必ず形を変えて役に立つと信じています。

・六甲の集合住宅 、 、 、

1998年に完成した明石海峡大橋は日本人の意気込みと技術力を結集した偉大な建造物です。長さは4000メートル、橋脚のワンスパンは1940メートル。これほど海流の流れが激しいところに橋脚を建てる技術をもっているのは日本だけだといわれています。けれども日本の産業基盤が中国にどんどん移ってしまうと、すばらしい技術が継承できなくなって日本の技術が廃れてしまう恐れがあります。土木だけでなく建築だって技術者の力が不可欠です。何とか日本の技術力を守り、これからも向上させていかななくてはと思うのです。

技術力に支えられたプロジェクトとして「六甲の集合住宅」は想い入れの強い仕事です。

1978年に始まった 期の敷地は傾斜60度という斜面で、さらに第一種住居専用地区や国立公園、風致地区といった法的規制が厳しい厄介な場所でした。施主は斜面部分の利用は諦めて80坪ほどの平地部分に段状の住宅を建てたいと言っていました。私はその要求に納得できず、60度の斜面をよじ登って土地の測量をしました。すると600坪ありました。そこで斜面を削り出して、5.8×4.8メートルのユニットを基本とした幾何学的な構成の集合住宅を設計しました。60度の急斜面に建物を作るのですから工事は困難を極め、完成までに5年の歳月を費やしました。

期工事は 期の形が見え始めた1982年頃に、隣接地を所有していた三洋電機のオーナーの「周囲の土地を調整すれば2400坪ほどになるので、次にチャレンジしてみないか」という話から始まりました。これも難しい仕事になることが分かっていたので、わたしはちょっと躊躇しました。すると「安藤さんは勇気がなくなったな」と言われまして、負けず嫌いの私は思わず「やります！」と返事をしてしまったわけです。

第 期工事は完成までに約8年かかりました。 期は 期を踏襲して、急斜面に14層の段状集合住宅を設計しました。但し建物の規模が 期の4倍近くあったので建物の中に室内プールや児童公園などのパブリックスペースを配しました。これらの施設は住人だけでなく近隣の人たちも自由に使うことができます。 期、 期工事で面白かったのは工務店の対応です。 期のときには超難工事が予測できたために大手の建設会社は工事を引きうけてくれず、やる気に満ちた地元の工務店が頑張ってく

れました。ところが 期では、 期ですすでに安全性が保証されたので大手建設会社が請負いました。

期が完成すると私はまたまた頼まれてもいないのに隣接する神戸製鋼の社宅の建替案を作りました。この頃になると私はこの斜面全体の景観をデザインしてみたいと考えるようになっていたのです。さっそく設計図を持って神戸製鋼に話をしたところ「とんでもない!」と叱られてしまいました。ところがどうでしょう。1995年の阪神淡路大震災で社宅の設備が壊れてしまいました。今度は神戸製鋼から「安藤さんの設計はできているのですか?」というお問い合わせをいただきました。そして復興住宅の意味合いを込めて私のプランが建設されることになり、1999年に完成しました。

しかしこれで「六甲の集合住宅」が完成したわけではありません。 期に程近いところに1万坪ほどもある大病院がありました。ここをセコムが買い取って老人医療と病院を併設した総合医療施設を作ることになりました。ここでは周辺地域とネットワークを図りながら24時間体制の医療が実現される予定で、来春には着工できそうです。

さて、六甲の一連のプロジェクトを通して私が拘ったことのひとつは、景観をデザインするという点での「緑化」でした。そのため 期と 期では緑地体を意識的に作ってきました。 期にあたる医療施設にも散歩道を設け、緑豊かな風景を実現したいと考えています。

振りかえってみますと、「六甲の集合住宅」は1978年の 期から始めて 期が完成するまでに35年から40年くらいがかかることになります。そして 期、 期、 期、 期という各プロジェクトは三洋電機、神戸製鋼、セコムがオーナーであり、山全体は神戸市の所有といったように複数の企業や団体が絡んでいます。このような仕事できたのは、次はこうしたいという「夢」を描き続けてきた結果ではないかと思うのです。クライアントにとっては「1度くらい、頼んでもいないのに勝手に絵を描いて見せにくる変わった男と一緒に夢を追ってみようか」ということだったのでないでしょうか。

・「白い花の咲く木を植える」運動

「夢」ということでは震災で荒廃してしまった神戸復興の象徴として「白い花の咲く木」を植えようという運動をしています。一昨年には30万本を植えることができました。30万本目は震災直後に神戸を訪問された天皇后陛下に植えていただけないかと考えて、私が宮内庁に手紙を書きました。3カ月後であればだいじょうぶというお返事を賜り、泰山木を植えていただきました。

阪神大震災後、私は半年ほど仕事をストップして依頼も受けていないのに25カ所ほどの復興エリアを設計して兵庫県や神戸市、国土交通省に提案していました。そして神戸製鋼跡地に建設される防災のための「神戸水際公園」と隣接する「兵庫県立美術館」の建築計画に参加することになり、ここにも白い花の咲く木を植えようと計画しました。そこで神戸市が政令指定都市なので、全国の政令指定都市から木を寄付していただき「政令指定都市の森」を作ることにしたのです。さっそく各市長宛に手紙を書きましたところ、7都市からはすぐにお返事をいただいたのですが残り5都市は無返答です。全県参加でなければ森はできないので、その後もいろいろ手を尽くしまして、最終的には全部の政令指定都市が木を送ってくださいました。そして何とか目標の30万本を植えることができました。今では「本当によく植ったわ」と感心しています。春になると神戸のあちらこちらで白い花が咲きます。皆さんも神戸にお越しの際には是非見てください。

・直島コンテンポラリーアートミュージアム

長い年月関わっている仕事ではベネッセコーポレーションの直島プロジェクトがあります。直島は産業廃棄物処理を巡って弁護士の中坊公平さんが戦った豊島の隣あり、島の半分がはげ山という荒廃した状態でした。ベネッセの福武社長はこのはげ山に緑を戻したい、そして子どものキャンプ地を作りたいとあって来られました。私はすごい夢をもった人物だなあと感心しましたが、現実はそんなに簡単ではありません。

現在直島は人口が4000人ほどで、年々減少しています。そしてベネッセが運営するコンテンポラリーアートミュージアム、ホテル、子どものためのキャンプ地があります。美術館やホテルは私の設計で、瀬戸内海の美しい風景に溶け込むように建物は地下に潜っていて、さらに月日がたてば蔦に覆われて自然の一部になります。ここに来ると感性の鈍い人はほとんど絶望的な1日を過ごすことになりませんが、面白がってくれる人にはとても魅力的な空間なのです。敷地の中には大竹伸朗さん、草間彌生さんといったアーティストの作品が自然の中に上手く展示されています。アーティスト・イン・レジデンスのようなこともやっていて、「円」の作品で有名なりチャード・ロングにも壁面に作品を描いてもらいました。建築家としては自分が作った白い壁に絵を描いてもらうというのはちょっと複雑な気持ちですが、彼は思考錯誤を繰り返しながらユニークな作品を仕上げてくれました。

直島は200～300年前まではとても豊かな島だったそうで、今でもきれいな民家が幾つか残っています。こうした民家を壊してしまうのではなく現代美術の展示空間として再生しようという福武社長のアイデアで、廃屋を借りてアーティストとのコラボレーションによる新しいアート空間を幾つか創っています。伝統的な民家と現代美術の対比と融合がとても魅力的です。例えばジェームス・タレルは色彩空間を創作しました。どういう作品かといいますと、観客は真っ暗な部屋の中に入ります、短気な人は「真っ暗だ、出よう」とすぐに出てしまいますが、10分くらい部屋に留まっていると目が慣れてきてポーッとネオンサインの作品が見えてくるのです。自分の感性を試すには面白い作品だと思います。内藤礼さんの作品は一人ずつしか鑑賞できないという仕掛けです。

直島で私は今 期目のプロジェクトを手掛けています。敷地が塩田の跡地なので空間自体は地中に埋め、塩田の風景をそのまま継承させる計画です。この美術館ではモネの「睡蓮」を含めて、作品は永久展示されます。私の意図はエントランスを入るとまず現代美術が展示されていて向こうの方にモネがある。つまり作品を通して100年前から100年後を見渡せる空間構成を目指しています。

・「瀬戸内オリーブ基金」

先ほど少し話しましたが、瀬戸内海の島々の多くは石材の採掘や産業廃棄物の不法投棄、公害などによって荒廃しています。そこで中坊公平さん、河合隼雄さん、瀬戸内寂聴さんらと瀬戸内の島に100万本のオリーブの木を植えようと「瀬戸内オリーブ基金」の活動をしています。講演をする度に募金をお願いしたり、ユニクロやコムサ・デ・モードのショップに募金箱を置いていただいたりして資金を集めています。100万本という数は結構大変だなと思っていたら、私たちの活動に感銘していただいたのか、瀬戸内の小学生による「どんぐりプロジェクト」が生まれました。40校くらいの小学校が参加しています。子どもたちが拾ったどんぐりを土の中に入れておくと8割が発芽するそうで、その苗を自然に帰そうというものです。この運動は他県にも広がりつつあります。

・『ブルータス』の注文住宅プロジェクト

最後に、最近手掛けました小住宅についてお話しします。これは3年ほど前の雑誌『ブルータス』の「約束建築 安藤忠雄が家を建ててあげます」という特集で、読者から応募してもらって家を建ててあげますという企画で、他にも数名の建築家が参加しています。私には80件くらいの申込みがあり、その中から3件を選びました。1つが明石海峡大橋を臨む海岸沿いの住宅、2軒目は被災地である神戸市長田地区の家、3軒目が東京の千代田区内の1辺4メートルという敷地の住宅です。

1軒目は明石海峡大橋を一望でき、向こう側には被災地である淡路島も臨むという敷地で、私のような復興支援をしている人間にとっては外せない場所です。土地を見て、1辺4メートル50センチの箱が地階、1階、2階、3階と重なって4階部分は海に突き出した恰好のプランを作りました。地階は仕事場、1階はバスルーム、2階はベッドルーム、3階が書斎で、4階がリビングルームです。4階は海に突き出しているので、窓際に立つとまるで水の上に浮いたような感覚になります。

千代田区の住宅は4人家族のための家で、1階がバスルーム、2階が子ども部屋、3階がリビング、4階が両親の寝室です。1辺4メートルという極小住宅ですが何とかプランがまとまったという時点になって、施主から「実はお話が……」と連絡をもらいました。こういうときのお話は良い話ではありません。内容はお金が500万円しかないのこれから貯めますということでした。「建設費が3000万円として1年でいくらためられるのですか？」と尋ねたところ、「250万円は貯めます」と。このプロジェクトも結局15年くらいかかってしまいそうです。「まあ、考える良い機会をいただいたな、頭の刺激になったな」と考えることにしました。建築という仕事を続ける上では、こうした発想や感覚がとても大事だと思います。

コンペも同じです。こちら側は当選すると思ってコンペに参加するわけです。当然、勝つぞと思っています。ところがある日、パッと1枚のファックスが来ます。ファックスの10枚のうちで9枚は「残念でした」という落選通知です。もちろん読んだ瞬間はムッとします。膨大なエネルギーを注ぎこんだのだから当たり前です。でもまた次の日にコンペのお誘いをいただくと「よし、頑張ろう！」という訳です。こう考えますと、感情の起伏が人間を生きさせてくれているんだなあと思います。負けても勝っても、それは大した問題ではありません。勝ちたいの確かですが、「連戦連敗」の中にこそ学ぶ可能性があるのです。それが多ければ多しだけ、人生は楽しいのではないのでしょうか。そのためには、まず体力と気力だと思う今日この頃です。

終わり

講師略歴

安藤忠雄（アンドウ・タダオ）氏、建築家

1941年大阪生まれ。独学で建築を学び、1969年安藤忠雄建築研究所を設立。
エール大学客員教授（1987年）、コロンビア大学客員教授（1988年）
ハーバード大学客員教授（1990年）東京大学教授（1997年～）。

主な受賞

日本建築学会賞（1979年）、アルヴァ・アアルト賞（1985年）、フランス建築学会ゴールドメダル（1989年）、日本芸術院賞（1993年）、プリツカー賞、フランス文学芸術勲章（シュヴァリエ）、朝日賞（1995年）、高松宮殿下世界文化賞（1996年）、フランス文学芸術勲章（オフィシエ）、英国王立建築家協会（RIBA）ゴールドメダル（1997年）、アメリカ建築家協会（AIA）ゴールドメダル（2002年）他

主な作品

「住吉の長屋」、「六甲の集合住宅」、「真言宗本福寺水御堂」、「光の教会」、
「大阪府立近つ飛鳥博物館」、「FABRICA（ベネトン・コミュニケーションリサーチセンター）」、
「ピューリッツァー美術館」、「淡路夢舞台」、「フォートワース現代美術館」、
「西田幾多郎記念哲学館」他。現在、ピノー現代美術館、同潤会青山アパート建替プロジェクト
他進行中。

2002年度第12回物学研究会レポート
「連戦連敗の中にこそ可能性はある」
安藤忠雄氏（建築家）

写真・図版提供

; 物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

[物学研究会レポート]に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
[物学研究会レポート]に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1999 ~ 2003 Society of Research & Design. All rights reserved.